

■タイトル■

メキシコの看護教育における社会奉仕実習④

ハリケーンによる被害と社会奉仕実習生

■著者■

群馬大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程

■リード■

約3年前の2005年10月初旬に中米大陸を襲ったハリケーン・スタンは、連日の大雨により、洪水や大規模な土砂災害をもたらした。メキシコのタパチュラ市では7,500軒余りの家屋が被災し、2万7,000人余りが避難所へ（被災1週間後）、約10万人に約1カ月間の食料支援が行われる事態となった。社会奉仕実習生は、この被災からどのようなことを学んだのだろうか。

■本文■

被災の実際

筆者が被災後3カ月目にタパチュラ市をたずねた際、被災者らは当時の経験を「10日以上も雨が続き、汚染し濡れたままの着衣や寝具ですごした」、「避難所はどこも人であふれかえり、清潔な水もトイレもなかった」と語った。政府は被災直後から感染症対策に着手したが、25万人余りが急性呼吸器感染症、発疹等の皮膚疾患、急性下痢症、寄生虫症、結膜炎等を発症し、これらの健康問題はその後数カ月間継続した。

社会奉仕実習生と被災支援

メキシコでは医療教育の一環として、学生が一定期間、地域あるいは民間の施設で保健医療業務に従事する「社会奉仕実習」が義務づけられていることはこれまでも述べたが、このとき筆者が滞在していた社会奉仕実習の調査地とタパチュラ市は同じ州に位置し、実習生が活動する施設からも多くの職員が緊急支援に出動した。しかし実習生らの派遣については「現地での安全が保障できない」という理由で見送られた。

被災地に向かう道路や橋はあちこちが寸断され、輸送がままならないなか、支援物資の盗難・強奪が相次ぎ、現地の治安は深刻な問題となっていた。3カ月後の時点でもインフラの復旧はきわめて遅く、すり減ったタイヤのバスで8時間、山の斜面を滑りながら走らなければ現地に到着できなかった。路肩には大破した泥まみれの家屋や車が折り重なるように放置され、倒壊の危険を覚悟で被災家屋での暮らしを再開した住民も少なくなかった。当然のように出動する心づもりでいた実習生らにとって、この派遣見送りは「国内でも最貧州の現地の大きな問題と一緒に携れなかった」という悔いを残した。

ハリケーン・スタンは実習先の市内の家屋にも浸水をもたらし、一部の市民が実習先の

施設に一時避難をすることになった。そこで実習生らは 100 人余りの避難民の生活物資の調達や避難所内での生活指導、健康管理などにあたった。ある実習生はこれを機に、降雨時の河川の水位の監視や漂流物によって自然形成される堰の防止策を自ら実行し、その後も敷地内の非難経路の明示や避難訓練などを積極的に企画・実施した。

「生まれ育った首都にいる限りこのような経験はなく、大学でも災害における看護について教えられたことはないし、予想もつかなかった。ここで気がついた自分たちの役割をまとめて論文にしてみたい」

実習生は、災害における看護の役割を自分たちなりに見出すことで、被災地の窮状に答えられなかった思いを還元しようとしたのである。



3ヵ月後の洪水被災地